

学園情報 174

2023年3月1日発行

AZABU UNIVERSITY 麻布大学 麻布大学附属高等学校
麻布大学同窓会



今号テーマ

「格致日新」

【特集1】3年ぶりの対面開催で
麻布大学学生祭を開催

【特集2】麻布大学が取り組む
各補助金事業プロジェクトについて

PICK UP

相模原市と教育課程の編成に関する懇談会を開催

2023年1月25日、相模原市役所にて、

「2022年度 相模原市と麻布大学との教育課程の編成に関する懇談会」を開催しました。



懇談会の様子

麻布大学村上先生、菊水先生、前田教務部長らが出席し、地域の課題解決、活性化に向けた取組や教育課程の新たな授業・教育プログラムの開設に係る意見交換を行い、より一層の相互連携・協力体制の強化に繋がる懇談の場となりました。



相模原市役所本庁舎本館の展望室



展望室からの本学の位置

懇談会後には相模原市役所本庁舎本館の最上階にある展望室を訪れ、見晴らしのよい展望を束の間楽しめました。東京タワー（東京都港区）、東京スカイツリー（東京都墨田区）なども眺望でき、ちょうどその間には本学のキャンパスを確認できました。

※見学可能日時：平日開庁日の8:30～17:00 入場料無料



今号のテーマ「格致日新」

格致日新(かくちにつしん)＝物事の本質や真理を日々追究し続け、常に向上し続けること。「格致」は「格物致知」を略した言葉で、物事の本質や真理を追い求めて、知識を高めることの意。「日新」は毎日新たに向上し続けることの意。今号では、3年ぶりに対面で開催された大学学生祭と、大学が取り組む補助金事業プロジェクトについて特集しています。格致日新を形にするふたつの事例をご覧ください。

CONTENTS

〈ピックアップ〉		〈トピックス〉	
相模原市と教育課程の編成に関する懇談会を開催	02	●麻布大学	08
目次	03	●麻布大学附属高等学校	10
		●麻布大学同窓会	12
【特集1】		退職教職員あいさつ	14
3年ぶりの対面開催で麻布大学学生祭を実施	04	麻布大学ワンだふる本募金雑誌スポンサー募集	
【特集2】		編集後記	15
麻布大学が取り組む各補助金事業プロジェクトについて	06		

学園情報 **174**
2023年3月1日発行



3年ぶりの対面開催で麻布大学学生祭を実施

INTERVIEW

**ゼロからではなくマイナスからの
リスタートだった今年の大学祭**

**おふたりが大学祭の実行委員になったきっかけから
教えていただけますか？**

[松下さん] 麻布大学には、学内のサークル活動のサポートを行う麻布大学全学学生自治会という団体がありますが、その活動のひとつが大学祭の運営で、それを直接担当するのが1～3年生で構成された実行委員になります。私の場合、高校時代からイベントの運営に興味があったことから、大学で一番大きなイベントである大学祭の運営に携わるため、自治会に入会。以来、1年生のときから実行委員の活動にも積極的にかかわるようになり、2年生の副実行委員での活動を経て、3年生では実行委員長に立候補しました。

[富山さん] 私は中学、高校で学校祭の実行委員をやっていて、それがとても楽しかったので、大学でもやりたいと思ったのが自治会に入るきっかけでした。そして、2年生のときから大学祭の準備に本格的にかかわるようになって、3年生になったとき、展示・模擬局を担当してもらえないかと誘われて、企画長を務めさせていただくようになりました。

今回の大学祭のテーマとなった

**「Restart～とこ豚(トン)楽しむ麻布祭～」について
お聞かせいただけますか？**

[松下さん] 今年度のテーマには、大学祭が3年ぶりの対面開催だったことから、改めて再出発したいという思いと、最初から最後まで楽しんでいただけるような大学祭にしたいという願いが込められています。

[富山さん] 自治会のメンバーからテーマを募集したのですが、例年、動物にからめた内容になることから、「羊羊(Yo Yo)!!」みたいにはっちゃけた候補も出たりしました。ただ、やはり3年ぶりの対面開催ということへの思い入れもあって、このテーマに決定しました。

3年ぶりの対面開催にあたって苦労はありましたか？

[松下さん] 対面開催することが決まり、準備がはじまったのが今年の5月。正直、不安はありましたが、大学最大のイベントの盛り上がりが見失われていくことへの不安の方が大きかったので、今年はぜったいに成功させようと思いました。

[富山さん] ただ、私たちは入学してから一度も対面開催をしたことがなかったため、運営に関するノウハウがほとんどない状態でしたから、スケ

01

特集1

2022年10月29日・30日の2日間にわたって、
3年ぶりに対面開催されることとなった

麻布大学学生祭。

ここでは、実行委員本部スタッフとして

その運営に携わったふたりの学生に、

開催に至るまでのエピソードや

大学祭に込めた思いについてうかがいました。



生命環境科学部食品生命科学科3年
実行委員長

松下 菜さん

獣医学部動物応用学科3年
展示・模擬局企画長

富山 怜那さん

ジャーリングを含めて準備には本当に苦労しました。

【松下さん】 昔の資料を見返したり、提出された書類に記されている年月を調べたりして。今の時期には、これをやらなくてはいけないんだということを一つひとつ見つけては、それをこなしていくという作業のくり返しは結構きつかったですね。

【富山さん】 先輩たちに聞こうにも、対面開催を経験したことのある先輩は大学にほとんどいませんでしたし……。そんなとき、先代の自治会会長経由で連絡をくださったOBやOGの皆さんのアドバイスには、本当に助けられました。

【松下さん】 自治会のメンバーも以前は100人規模だったのが今年は60人くらいしかいなかったため、圧倒的にマンパワーが足りませんでした。それ以上に苦労したのはコミュニケーションの問題でした。コロナ禍もあって、日ごろからみんなが集まる機会がほとんどなくて、直接話をしたことがない1、2年生とかもいたので、まずは人間関係を築くところからはじめないといけなかったんです。

【富山さん】 サークルなど大学祭の出展団体のみなさんの方でも、開催のノウハウが失われつつあったので、お互いに話し合いを重ねながら、本当に一歩ずつという感じだったと思います。はじめはゼロからのリスタートになるんだかと思っていましたが、実際はじまってみたらマイナスからのスタートだったのは本当に想定外でした。

大学だけでなく地域の財産として 盛り上がりを取り戻していきたい

では、そうした状況を乗り越えて

実際に開催できたときの喜びは大きかったのでは？

【松下さん】 同級生だったり、先輩や後輩、来場された皆さんから「大学祭ができて良かったです」「楽しかったです」とか、「実行委員がいたからできたんだよ」という言葉をいただくたびに、対面開催して本当によかったと思いました。

【富山さん】 企画展の内容や雰囲気褒めていただいたこともうれしかったんですが、感染対策についても万全の体制を整えてのぞんだ結果、何ごともなく2日間を終えられたことにほっとしました。

今回の大学祭で、麻布大学らしさが感じられたのは
どんな部分でしたか？

【松下さん】 馬のエサやり体験や引馬は獣医系大学らしいイベントだと思いますが、近所の方とかがペットを連れて散歩がてら来てくださる風景が見られるのは、地元根づいた麻布大学らしさかなと思います。地域の皆さんがいろいろ楽しんでくださっていて、大学祭が地域交流イベントというか、地域の財産になっているんだと感じられたのは印象的でした。

【富山さん】 模擬店でいうと、味の素株式会社とコラボレーションして、うま味を生かした「おいしい減塩」メニューを提供できたのも、食品生命科学科がある麻布大学らしさだと思います。メニュー開発のハードルが高く、開催前日まで話し合いが続いたそうですが、減塩チヂミや減塩カルボナーラうどん、減塩焼きそば、減塩豚汁、うま味を効かせてグレードアップしたレモネードなども販売し、それぞれの模擬店には長蛇の列ができるほど人気を集めました。

では、3年ぶりの対面開催というリスタートを経て、
今後に向けた課題はありますか？

【松下さん】 もっと団結力をもたなければいけないと感じました。今回の大学祭に関しては、何もないどころかマイナスの状態からスタートしたわけで、無事に開催できただけで十分な成果だったとは思いますが、今後はもっと学生同士がコミュニケーションをとっていくことを心がけなくてはいけないと、強く思っています。

【富山さん】 どんなことをするうえでも、コミュニケーションが大切だということを痛感させられましたし、みんな仲よくやれた方がぜったいに楽しいですから。それと準備は早めにやるのもポイントですね。

【松下さん】 今後、私たちのように準備に困らないよう、資料類はすべてファイリングして大学祭運営のためのマニュアル的なものはつくったので、活用していただければと思います。

【富山さん】 フリーマーケットの復活も、来年度以降の目標にしてほしいです。今年も開催できないことを知った地域の方々から、とても残念が声も多く聞いたので、大学だけでなく地域のひとつの財産としてやり続けてほしいです。

【松下さん】 あとは学生の皆さんも、来場してくださった皆さんも、大学祭で盛り上がり楽しんでくれたらそれでじゅうぶんです。

【富山さん】 今年もたくさんの方が来場していただきましたが、昔の映像を見ているとキャンパスに人があふれるくらいにぎわっていましたから、コロナ禍を乗り越えたうえで、またそうした風景を取り戻していけたらうれしいですね。

02

特集2

麻布大学が取り組む 各補助金事業 プロジェクトについて

文部科学省補助金事業への採択を受け、
現在、麻布大学が積極的に取り組んでいる
3つのプロジェクトについて、
各プロジェクトの担当者にその概要や事例、
今後の展望等をうかがいました。



INTERVIEW

- 文部科学省事業名:「出る杭を引き出す教育プログラム」
- 本学事業名:「動物共生科学ジェネラリスト育成プログラム」
- 責任者:村上賢先生 ●推進:菊水健史先生



自分を知り、未来を見て、
さらにその上へ

村上 賢 先生

——当プロジェクトの 概要について教えてください。

もともと動物応用科学科で取り組んでいた、1年次の後期から本物の研究へチャレンジできるプログラムがベースとなっています。この「動物共生科学ジェネラリスト育成プログラム」が、文部科学省の令和2年度大学教育再生戦略推進費「知識集約型社会を支える人材育成事業」の『メニューⅡ 出る杭を引き出す教育プログラム』に全国の大学で唯一採択され、現在に至っています。その成果としては、プログラムに参加した学生のリテラシーやコンピテンシーの数値が、他の学生よりも伸びていることが確認されており、特にコンピテンシーでは持続力やリーダーシップの部分で、大きく成長していることがわかっています。

——具体的な取り組み事例として、 どういったものがあるのでしょうか？

現在進行中の取り組みとして最も特徴的なのが、高校・大学・大学院の有機的な連携です。シームレスな「学びの環境」を整えることにより、自分の学年にとらわれることなく、幅広い先端教育を受けることを可能にしています。特に、高校生から大学の教育研究を受けられる「いのちと共生の研究プログラム」により、2023年度からは、高校生が大学の先生から直接指導を受けながら研究にチャレンジできるようになります。また、大学の授業も受講可能で、高校生の段階で受けた大学の授業は、入学後に大学の単位として認定され、大学での自由な学びの時間を増やすことができます。さらに、2024年度からはプログラム修了者向けの指定校推薦特別試験制度を設け、各学科の目的にかなった優秀な生徒を積極的に受け入れる予定です。現在、このプログラムには周辺の高校3校が参加しており、今後もその数は増えていく予定です。

——当プロジェクトは、今後、 どのように展開されていくのでしょうか？

2023年度からは、高校・大学・大学院が完全な形でつながることになります。まず取り組まなければならないのが、シームレスな「学びの環境」で学生の皆さんがどれだけ成長したのか確認していく作業となります。つまり、実際に成果が確認できるのは6年後。さらに当プロジェクトの本来の目的が、「今後の社会や学術の新たな変化や展開にこたえる人材」を輩出することにあるため、受講した学生の皆さんが就職後、社会でどのように活躍できるのか、精査していくことが重要となります。そもそも大学教育の最終的な価値とは、そこまで含めた成果を加味したうえで決定すると、本学では考えています。そうした意味でも当プロジェクトの着実な実施が、日本の大学教育の新たな指針になっていくよう、力を尽くしていきたいです。

- 文部科学省事業名：「デジタルと専門分野の掛け合わせによる産業DXをけん引する高度専門人材育成事業」
- 本学事業名：「最先端ICTによる動物・生命系デジタルデータを活かす産業界フロントランナー育成のための教育推進事業」
- 責任者：村上賢先生 ●推進：菊水健史先生



新しい時代が求める人材を、 新しい教育で育成する

菊水 健史 先生

——当プロジェクトの 概要について教えてください。

創立130周年を機に開始された麻布教育改革プロジェクト「麻布未来プロジェクト130」では、新しい時代に向けた5つの改革の実施が発表されましたが、そのなかで最初に発表された「データサイエンス教育の推進」が当プロジェクトの基盤となっています。Society 5.0の社会で求められる、データに基づいて適切な判断ができる人材を育成していくことが大きな目標になっており、「動物・食品・環境産業との連結」「専門性を生かした現場実習デジタル化」「デジタル導入教育」等を実施。その推進のために、全学部におけるデータサイエンス基礎科目（数学、統計学、コンピュータ演習）に加えて、全学共通のデータサイエンス発展科目（地球共生系データサイエンス）が2020年度から開講されています。

——具体的な取り組み事例として、 どういったものがあるのでしょうか？

獣医学部の高木哲先生が開発した、獣医学系大学で初の仮想現実（VR）技術を採用した教育は、そのひとつです。獣医外科学実習の授業において、ゴーグル型のVRヘッドセットを用いて360度カメラで撮影したVR動画を視聴することにより、非常に高い臨場感をもって体験できるシステムで、実習動物を使用しないこの取り組みは、動物福祉の観点からも発展が期待されています。ほかにもドローンを使用した野生動物の調査、GPSを用いた渡り鳥の飛行観測、心拍等を遠隔で調べられる装置を用いた乗馬セラピーのデータ収集。食品分野では、写真撮影するだけでカロリーや塩分量が推定できるスマホアプリの開発、環境分野では河川水のDNA調査によるモニタリングを行っています。

——当プロジェクトは、今後、 どのような発展が期待されているのでしょうか？

プロジェクトの成果を大学内にとどめておくのではなく、これを地域に波及させ、大学近隣はもとより相模原市の活性化に活かしていくことをめざしています。具体的な取り組みとしては、本学で購入した、食べ物のうま味成分などを網羅的に解析できる味覚センサーを使用し、相模原市で生産された卵を測定。その味を数値化して特徴を公表したうえで、販売店やこれを使用した料理が食べられるレストランを公開していきます。ほかにも、本学に蓄積されている生物観測に基づいた気象データをもとに、相模原市の花の開花予測を発表し、時期ごとにおすすめの犬の散歩コースを紹介する等、最先端ICTによって得られた成果を市民の皆さんに還元していければと考えています。

- 文部科学省事業名：「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特性対応型）」
- 本学センター名：「DEI推進センター」
- 責任者：村上賢先生 ●センター長：永澤美保先生



女性が働きやすい組織は、 きっと誰にとっても働きやすい

永澤 美保 先生

——当プロジェクトの 概要について教えてください。

麻布大学では採用時ジェンダーバイアスは少ないものの、教員公募の応募者と採用者の女性比率ともに約20%となっており、生物系女性研究者に「働きたい大学」として選ばれていない現実があります。また、女子学生の博士前期課程進学率は4.9%、博士後期課程内部進学者に関してはほとんどいないのが現状です。つまり、女性研究者にとって魅力的なワークライフバランス支援体制の充実とアピールが急務となっていることから、当プロジェクトはスタートしました。また、本学では女性が働きやすい組織とは、男性にとっても働きやすい組織を意味していると考え、育児や出産、介護をしながら、性別を問わず誰もが研究に取り組みやすい環境づくりをめざしています。

——具体的な取り組み事例として、 どういったものがあるのでしょうか？

女性研究者が本学で働きたいと思うことができる環境、働きやすい環境を確立するとともに、女性研究者の裾野拡大のための取り組みを実行していくために、DEI推進センターを新設しました。名称をDEI（ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン）としたのは、多様な人の寄せ集めで終わるのではなく、誰もがそれぞれの能力を活かし、公平に組織の意思決定に参画することができる機会を得られることをめざしているためです。また、「女性研究者の研究効率の向上等のための取り組み」として、本学の卒業生を中心とした研究支援人材バンクの設立、学内及び地域と連携した介護・育児サポートの充実を促進。「女性研究者の研究力向上のための取り組み」として、研究互助体制の強化や研究費支援。「ダイバーシティ研究環境整備のための取り組み」として、啓蒙セミナーの開催、女子学生へのキャリア開発教育と多様なロールモデル像の提示等が実施していきます。

——当プロジェクトには、 どのような達成目標が設定されているのでしょうか？

具体的な数値として、女性応募比率及び女性採用比率30%、女性研究者の指導的地位の在職率26%に加え、学部女子学生の大学院進学率の増加が、現在設定されている達成目標となっています。しかし、ここで設定された数値の達成は、あくまでひとつの通過点でしかありません。当プロジェクトの成功に向けて本学の全教職員の中での合意形成を図り、性別を問うことなく、それぞれが持つ能力を發揮して研究に取り組むことができる、働くことができる環境を整えていくことを、最終的にめざしていきたいと考えています。

TOPICS AZABU UNIVERSITY

横須賀高等学校の生徒が本学で実験・実習を行う

8月7日(日)

神奈川県立横須賀高等学校の生徒さんと授業担当の先生が本学で実験・実習を行いました。この取り組みは、今年度から、横須賀高校のSSH授業「PrincipiaII」において、本学の獣医学部の菊水先生、長井先生、村上先生が開講する授業が行われており、当授業を履修している生徒さんが、前期授業の総まとめとして、本学の実験・実習施設を利用して、高校ではなかなか体験できないことを授業担当の先生とともに行いました。また、同日に開催された「オープンキャンパス」に参加され、学部・学科説明、体験実習、ジェネプロ発表会など、多くのイベントに積極的に参加され、大変有意義な1日を過ごして高校までバスで帰られました。

新渡戸文化高等学校の生徒が「金華山スタディーツアー」に参加

8月9日(火)

新渡戸文化高等学校の生徒さんが「金華山スタディーツアー(8月9日～12日)」に参加しました。この連携事業は、宮城県の金華山をフィールドの場所とし、『東日本大震災からの復興』と『シカを中心とした野生動物の調査・研究』を目的としたスタディーツアーであり、今回のスタディーツアーは、昨年度3月に引き続き、第2回目の開催となりました。今回のスタディーツアーは、予定を一部変更しましたが、高等学校では体験することのできない大学教員・専門研究家の方とともに生態系における動物の行動、生物同士の関係、野生動物の調査を行うことができ、大変充実したスタディーツアーとなりました。

本学教授がHACCPに関する講義を相原高等学校で実施

9月6日(火)

生命・環境科学部食品生命科学科の三宅教授が神奈川県立相原高等学校で「HACCPに関する出張講義」を実施しました。当日は、相原高等学校食品科学科1年生38人に対し、講義を行いました。

明星中学校・高等学校と高大連携協定を締結

9月26日(月)

麻布大学は、明星中学校・高等学校(校長:福本真也、本部:東京都府中市)と連携事業に関する協定を締結しました。協定書の締結式を両校の関係者の出席により実施しました。明星中学校・高等学校と相互に連携し、教育・研究の進展と地域社会の発展に向けて寄与することを目的として協定を締結しました。また本学の推進する「麻布出る杭」プログラムの特色を活かして、高大連携による研究強化の推進も含めて、SDGs時代に対応する科学人材の育成で協力していきます。



横須賀高校にてSSH授業「PrincipiaII」を開講

9月27日(火)

神奈川県立横須賀高校において、本学獣医学部の菊水先生、長井先生、村上先生によるSSH授業「PrincipiaII」が行われました。当授業を履修している生徒さんにとっては、はじめて高校内で本学教員による対面授業を体験しました。高校の先生とともに、グループワークなど、前期授業から継続中の研究活動を時間いっぱいまで行い、大変有意義な時間を過ごしました。



「山くじらフォーラム」において本学教授が基調講演を行う

9月28日(水)～9月30日(金)

麻布大学は島根県美郷町で行われる「山くじらフォーラム」に後援しています。フォーラムでは、生命・環境科学部麻布大学フィールドワークセンター長の江口教授が基調講演を行う他、フィールドワークセンターを見学いただきました。

島根県教育庁と県教育委員会が麻布大学フィールドワークセンターを視察

10月6日(木)

島根県教育庁と島根県教育委員会が、視察のため麻布大学フィールドワークセンターを来訪されました。江口センター長が1時間半に渡りセンターを案内しながら、島根県内の高等学校との連携、インシシの性格や行動、美郷町との連携した取組みなどを説明し、これまでの研究について紹介しました。また、島根県教育庁様から、「山の上と下でインシシの習性が違うことは驚きでした。」と御礼のメールを頂戴しました。麻布大学フィールドワークセンターを通して、島根県教育界での認知度を少しずつですが、高めています。

食堂が就労継続支援B型事業所として運営開始

10月12日(水)

麻布大学は初の試みとして、飲食店及び福祉事業経営の「合資会社さんぼみち」に委託して就労継続事業所として、学生食堂「さくら」をオープンしました。地域・社会への貢献と学生さんへの心身の健康を育みます。この学生食堂「さくら」が就労継続事業所となったことで、通常の事業所に雇用されることが困難な障がいを持った方に、就労の機会を提供するとともに、生産活動その他の活動の機会を通じて知識及び能力の向上のために必要な訓練を行うことが可能となります。そして、学生食堂としてオープンしたことで、学生さんにとっては単に食事をとる場所だけではなく、障がいのある方と接することで社会経験を積むことができます。



～トピックス 麻布大学～

全事務職員を対象に広報研修会を実施

10月21日(金)

大学広報力の強化に向けて、全学の事務職員(計33名参加)を対象にした広報スキルアップ研修会(SD研修)を9月に実施いたしました。本学が全学的に広報研修を実施するのは初めてです。少子化の進行により、大学入学者の人口減少が本格化する中、学生募集が厳しくなると予想されます。大学の学生募集において、認知度向上とブランド力の強化に向けた広報活動の重要性が高まっています。また受験生の大学選びにおいて、自分にとって相応しい大学を適切に選んで入学するために、大学の様々な活用方法をわかりやすく、発信することが望まれます。

2022年度麻布大学祭を開催

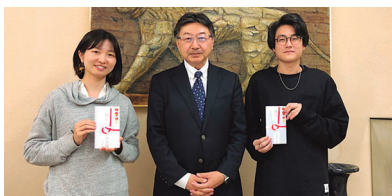
10月29日(土)・10月30日(日)

麻布大学祭を3年ぶりに対面開催しました!! 昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響で麻布大学史上初のオンライン開催となりましたが、今年度は対面実施となり麻布大学の良さを肌で感じて存分に楽しんでいただけた大学祭となりました。対面での開催が3年越しであることから改めて再出発したいという思いと、最初から最後まで楽しんでいただけるような大学祭にしたいという願いを込め「Restart〜とこ豚(トン)楽しむ麻布祭〜」というテーマを掲げ、3年分の思いを込めてお届けしました。

学生と教員による研究集会「研究三昧2022」を開催

10月29日(土)・10月30日(日)

学園祭に合わせて「研究三昧2022」を開催しました。研究三昧とは、本学の学生や院生が主体となって、自身の研究やアイデアをポスター発表するイベントです。参加者と心ゆくまでディスカッションし、研究室を超えた縦横のつながりを生み出すことを目的としています。コロナ禍のため2021年2月を最後にオンライン開催となっていました。この度、学園祭に合わせて久しぶりの対面かつ一般公開となりました。当日は延べ342人(29日)、303人(30日)にご来場頂き、活発な議論が行われました。参加者全員の投票によって、演題登録数82件のなかから以下2名のポスターが特に優れた研究発表として選ばれ、後日、川上学長から副賞が授与されました。



横須賀高校にてSSH授業「PrincipiaII」を開講

11月15日(日)

神奈川県立横須賀高校にて、9月に引き続きSSH授業「PrincipiaII」が対面で行われ、本学獣医学部 長井先生、村上先生、菊水先生が当授業を担当しました。生徒さんと本学教員により、3月のポスターセッションに向けたグループワークなどの研究活動が時間いっぱいまで活発に行われ、有意義な時間を共有しました。

セミの生物季節観測を実施

11月18日(水)

環境科学科では、2022年夏の生物季節観測として、学生によるキャンパス内でのセミの鳴き声と抜け殻の観測・調査を行いました。これは、国立環境研究所が実施している生物季節モニタリングの全国調査員調査、および相模原市の自然環境観察員制度の令和4年度全体テーマ調査として実施しています。その結果は全国モニタリング調査結果として共有されるとともに、相模原市自然環境観察員のセミの鳴き声分布・鳴き声カレンダー調査結果に収録されます。



新しい科学領域「未来共生科学」を展開

11月21日(月)

生命・環境科学部 環境科学科では、新しい科学領域として「未来共生科学」を提唱。2019年度から「企業と連携して実社会の課題に基づく学び(PBL)」[「生物多様性を体験的に学ぶフィールドワーク」][「気候変動の影響と適応策を探るデータサイエンス」といった実践的な学びを展開しています。今年9月には、これらの学びの中間成果報告会を実施。学生らに、主体性の向上や生物多様性に対する理解の深化といった変化がみられることを報告しました。現実のフィールドを題材とした教育を充実させ、地球規模の環境課題に対応する分野も強化し、現在の課題だけでなく将来的な課題も解決できる人材の育成を目指しています。

JR東日本環境アクセスとの社会連携型PBLが今年もスタート!

11月25日(金)

環境科学科では、株式会社 JR東日本環境アクセスのご協力の下、「環境フィールドスタディー(2年次選択科目)」において社会連携型PBL(Project Based Learning)を行っています。この取組は、環境科学科の新・教育プログラムの一つとして開始し、今年で4年目を迎えました。実社会のリアルな課題を知り、その課題解決に挑戦することで学びの動機を引き出すとともに、「問題を発見する」能力を磨き、チームで相互に知識を共有しながらコミュニケーションをとることで、「チームでの課題解決力」を高めます。

「学生食堂さくら」の記事が情報誌タウンニュースに掲載

11月30日(水)

就労継続支援B型事業所として2022年10月にオープンした「学生食堂さくら」が情報誌タウンニュースに掲載されました。相模原市で大学内に事業所を構えたケースは初めて、とのことで注目となっています。

イヌは自己と他個体を区別できるのか?

12月6日(火)

獣医学部介在動物学研究室の松下昌平(2019年博士前期課程修了)、永澤美保准教授、菊水健史教授は、イヌが自分の姿が映る過去の映像を、他のイヌの映像と見分けられるかを調べました。自分が映っている映像と、他のイヌが映っている映像を対象のイヌに提示して、生理学的反応を解析することで、自分と他個体を見分けることが可能なのか検証しました。本研究では、生理指標として心拍変動解析を用いました。その結果、他個体の映像刺激と自己の映像刺激に関しては、イヌの心拍変動の反応に大きな違いはみられませんでした。しかし、飼い主への愛着の強いイヌでは、他個体の映像刺激と自己の映像刺激との間に心拍変動の反応に違いが認められました。このことは、イヌが過去の自己映像と他個体の映像を異なる刺激として捉えた結果と言えます。本研究成果は「PLOS ONE」オンライン版に掲載されました。



TOPICS AZABU UNIVERSITY HIGH SCHOOL

文化祭

9月3日(土)・4日(日)

「元ある形に戻す」
まずはこれが我々の使命。

でも、「元」を知らない生徒たち。

「元」はベストなのか？
今一度考えさせられた文化祭となった。



芸術鑑賞会

11月11日(金)

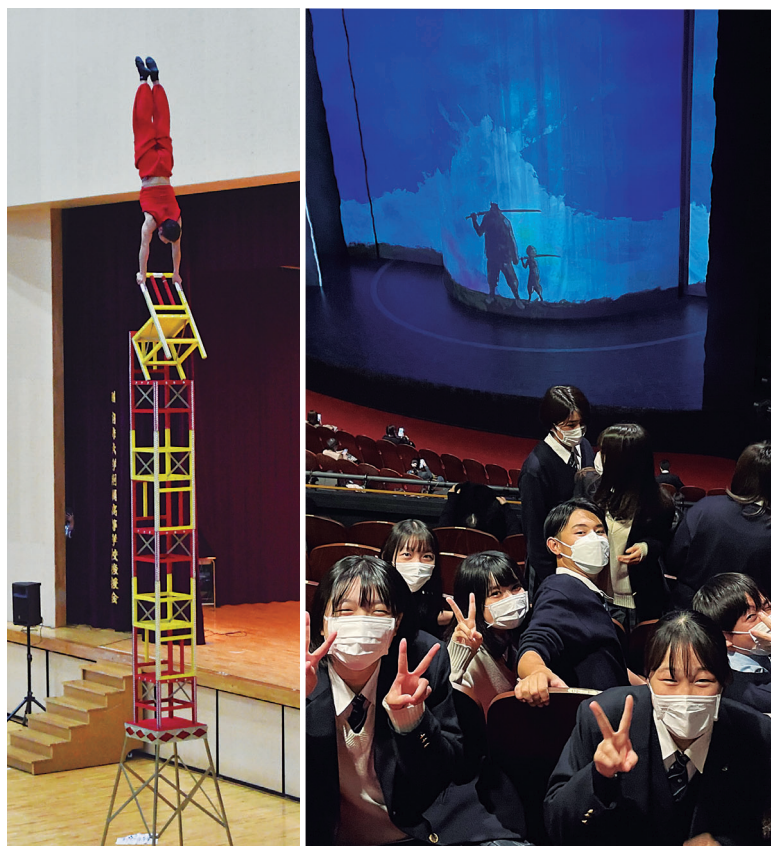
1・2学年「中国雑技」
3学年 劇団四季「バケモノの子」

わくわく ドキドキ
ハラハラ ウォウウォウ
イエイエイエイエイ
ウォウウォウウォウウォウ

出会ったことのない瞬間に
立ち会わせたいのです。
それが感情や視覚の経験となるから。

世の中には無数の
ドキドキやわくわくが待っている。
それに気づける人材であれ。

心から願っています。



～トピックス 麻布大学附属高等学校～

球技大会

11月28日(月)

通常通りの雨(笑) 延期日の雨(おいおい)
 ちょっまでよ…こんなこと未だかつてなかったぞ。
 再順延日…予報雨じゃないか(怒)

ホントお願いします。 本当にお願ひします。
 祈ったら 祈り散らかしたら
 晴れた!!!!(曇りでしたけどあれは晴れです)

溜まりにたまったストレスがプレミアムガソリンと化し、
 年内最後の行事にアクセル全開で挑む生徒たち。
 オーバーヒート寸前でした。
 その姿は、強いて言うなら「純粹無垢な生まれたての若者」という
 わけわからない言葉が一番似合う程の戦いっぷり。

そんな頑張りを見ていたら準備の苦しさや
 最悪を想定しての謝罪行脚などもう過去の産物。
 ありがとう。 君たちが思い出させてくれた

その頑張りや佇まいだけで 幸せや笑顔を与えたり、
 心動かす存在になっているということがある。
 気づかなくていい でも君たちには伝えてあげたい
 ありがとう。 本当によく頑張った!



これからのイベント

●9月
翔瀏祭



●10月
前期期末試験
2年生 修学旅行
1年生 社会見学



●11月
芸術鑑賞会
球技大会



●12月
後期中間試験



●令和5年1月
英検1次試験受験



●2月
英検2次試験受験
(外部会場)

●3月
卒業式
1・2年生 学年末試験
修了式
離任式



TOPICS AZABU UNIVERSITY ALUMNI ASSOCIATION

長野県支部の「おやきの実演販売」を終えて

10月29日(土)・30日(日)

2022大学祭(昨年10月29日(土)～30日(日))の同窓会ブースの一角で長野県支部の「おやきの実演販売」を行いました。大学祭への参加は平成20年以來の2回目になります。本来は令和2年に参加を予定していましたが、新型コロナ感染拡大の影響で大学祭が中止となり、またその後も大学祭の縮小開催などのため3年越しの「待ちに待った参加」でした。支部からは販売員として小林文範支部長以下4名が参加しましたが、全員がおやき販売作業(冷凍おやきの解凍～加熱～焼き目付け～保温など)は初体験でした。出来立ての美味しい「おやき」を提供するため事前に段取り打合せなども実施しましたが、不安を感じながらの実演販売でした。しかしながら、二日間とも天候にも恵まれ、原料斡旋業者から助言された「販売量は天候に大きく左右される」の心配はなく、加えて同窓会本部の志村事務局長の「売れ残りは同窓会が責任をもって引き取ります」の一言もあり、怖いものなしで実演販売に集中できる事が出来ました。

また、二日間とも支部準会員(長野県出身の大学関係者)の荻原喜久美教授(生命・環境科学部)や長野県出身の在学学生そして近県の同窓会交流員など、多数の皆様にご呼び込み・湯せん解凍・商品渡しなどをお手伝いいただきました。



おやきは一日目で仕入れの8割が売れてしまい、二日目の午前11時には完売することが出来ました。これもひとえに販売作業に汗だくになりながらご協力いただいた関係者皆様のお蔭だと感謝いたします。

「おやきの実演販売」は慌ただしい二日間でしたが、「信州おやき」の人気を再確認できたり、若かりし頃の大学祭を思い出す楽しい時間でもあり、ほどよい疲労を感じながら淵野辺を後にしました。

長野県支部事務局 平沢 久史



千葉県支部の「千葉県産落花生の販売」を終えて

10月29日(土)・30日(日)

例年恒例行事となっている、同窓会千葉県支部の「千葉県産落花生の販売」を大学祭初日と2日目に実施しました。

新型コロナウイルス感染症の影響により、大学祭が3年ぶりの開催となりました。初日は会員23名が参加しましたが、久しぶりのためと初参加も多く、経験者に聞きながらの準備作業となりました。

なんとか、準備を終えて販売を開始したところ、毎年楽しみにして下さっているリピーターの方で、まとめて何袋もお求めいただく方もいらっしゃいました。

今シーズンの落花生は豊作で味は抜群、上々のスタートを切ったと思われましたが、コロナの影響が肝心のお客さんが例年に比べて少なく大ピンチ!例年なら昼までに完売するところが、落花生の段ボールの数が一向に減りません。14時を過ぎて、初日だけで完売することは諦めて、急遽、有志6名が翌日も販売することになりました。2日目も販売して、最終的に売れ残った分は大学に御協力いただきました。

販売の最中に、立ち寄ってくれた在学学生から千葉県での就職を検討しているとのうれしい声をいただきました。多くの在学学生が千葉県へ就職して、職場や同窓会の会合で再会できることを願っております。

初日販売終了後、これも恒例となりました淵野辺の「餃子・王」で行う懇親会を、小倉理事長、市原准教授、曾川准教授を交え、楽しい時間を過ごすことができました。(新型コロナ対策強化のため楽しみにしていた学生さんの参加は残念ながらありませんでした。来年こそリベンジしたいです!)

落花生を購入して下さった方々、大学同窓会事務局の皆様、懇親会に参会して下さった先生方、ご協力いただき本当にありがとうございました。

来年は、コロナの心配をせずに、たくさんの在学学生、OB、地域の方々と交流できることを祈っております。千葉県支部としましては、次回もおいしい落花生をお届けできるよう頑張ります。

千葉県支部事務局 大坪 岳彦



～トピックス 麻布大学同窓会～

令和4年度日本獣医師会獣医学術学会年次大会(福岡)における同窓会ブース開設及び交流会の開催

11月11日(金)

令和4年11月11日(金)から13日(日)に渡り、標記大会が福岡市のヒルトン福岡シーホークで開催されました。それに合わせて、同ホテルに恒例の同窓会ブースを設置しましたが、今回は会場のスペースが手狭とのことで、残念ながら初日のみの交流会受付ブースとしました。本大学ブースのみの横断幕やのぼりの設置であったためか、多数の同窓生にお声をかけていただくことができました。

同窓会交流会は福岡市中心部に位置するホテル モントレラスール「ヌーヴォ」にて11日に開催し、25都道府県から69名の参加者をお迎えすることができました。

今回の交流会は令和元年度日本獣医師会獣医学術学会年次大会以来2年ぶりの開催であり、計画した昨年11月頃は新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)感染症も下火傾向でしたが、本年9月の第7波の流行時は、本大会同様に同窓会交流会の開催ができるのか気がききではなく、大変心配いたしました。

さて、交流会は福岡県支部佐藤清副支部長の司会進行で開催し、倉重聖支部長の開催地元挨拶、福山守同窓会長のご挨拶をいただき、麻布獣医学園小倉弘明理事長から来賓のご挨拶をいただきました。乾杯の音頭は福岡県支部西川修前支部長により、声高らかに開始の号砲が上げられました。歓談中は大学の紹介ビデオを流しながら、久しぶりに対面での親交を深めることができましたのではないのでしょうか。途中、FAVA大会等でご多忙な中、砂原和文日本獣医師会副会長も駆け付け、ご挨拶を頂きました。また、学園情報を兼ねて森田幸雄先生に大学のお話をいただき、各県より支部の状況をご報告いただきました。

宴も酣になりますと、応援団OBの皆様の演舞による大学歌と寮歌を会場との大合唱で宴を締めていただきました。

閉会は、同窓会九州地区連合協議会小澄正敬会長(熊本県支部)の万歳で交流会を終えました。

次回、兵庫県支部へバトンを繋げたいと思います。

福岡県支部事務局 永田 朋子



動物応用部会「卒業生と在学生の集う会」開催

11月26日(土)

コロナ禍により多くの同窓会事業が開催されずに迎えた2022年11月26日。ついに対面形式による「卒業生と在学生の集う会」を開催しました。21名(うちオンラインで参加は3名)の卒業生は久々の学生とのコミュニケーションを前に緊張していました。大島副代表の第一声により会はスタート。川上学長、小倉理事長、福山同窓会長のご挨拶に引き続き卒業生によるパネルディスカッション「楽しくなる就職先の見つけ方」が開催されました。

パネルディスカッションのあと15業界ブースに分かれ、6フェーズ、わずかにインターバル5分での3時間にわたる説明会に卒業生も必死の取り組みでした。

卒業生から多くの経験談と共に多くの提言がなされました。難しくても絶対に譲らない部分を持つ。迷うことなく挑戦して体験を積み重ねる。ワークライフバランスの重要性。夢は小さくても具体的に考える。多くの経験をして多くの仕事と接する。夢中になれることを見つける。やりたいこと(仕事)=好きなこと(情熱)×得意なこと(才能)、やりがい共有できる仲間がいる。

開催後、学生からのアンケート結果では、①参考になった47.8% ②興味深かった30.4% ③もっと違う話が聞きたかった17.4% ④あまり面白くなかった4.3%。

参加しての感想では、私たち大学2年生の見方に合わせて説明された。参考になる具体的なお話が多く、就職についてイメージを膨らませることが出来た。小さなグループで、直接企業の方からお話が聞けたことはいい経験だった。

例年のごとく多大なご協力を頂きました多くの先生方、大学キャリア支援課の皆様本当にありがとうございました。

少子化時代に突入した日本。麻布大学の未来は今後の学生の就職状況が大きなカギを握ることは間違いないと思います。そのためにも我々卒業生の学生への進路支援はさらに重要になると考えます。

今後も部会を超えた卒業生の皆様のご協力をお願い申し上げます。

動物応用部会代表 笠原 年春



GREETING

～退職教職員あいさつ～

● 在職中の思い出や感想を漢字1文字で例えると ① 在職中の一番印象に残った出来事 ② メッセージ



転

国研での29年間の研究生生活から麻布大に転職し、仕事も生活も一転しました。「教える」だけでなく、学生達から「教わる・学ぶ」ことも多く、正に人生の転機となった9年間でした。

生命・環境科学部 環境科学科 水環境学研究室
教授 稲葉 一穂

① 1年生の「化学」の授業で小テストを実施していましたが、「自分の理解度を深めたいから満点を取るまで」と言って何回も受験に来る学生がいました。その学生の姿勢から「入試は一発勝負で合否を決めるけれど、授業は半年の期間に合格ラインまで自分を成長させたかを判定するもの」という評価のあり方を考えさせられると共に、教える側も教わる側も粘り強く学びに関わることが大切だと理解できた瞬間でした。② 受験者数の動向などで学科としての立ち位置は変化してくるのかも知れませんが、地球温暖化、廃棄物拡散、生物多様性減少など環境問題は山積しており、環境を見つめ・守り・育む教育は一層重要になると思います。麻布大学がそのような視点での教育の拠点であり続けることを期待します。



愛

学生さんを受せなくなったときは大学を辞める時だと思って教員を志していました。危機は何回もありましたが、何とか無事に退職を迎えられそうで、心から感謝しております。

生命・環境科学部 臨床検査技術学科 病理学研究室
教授 荻原 喜久美

① 1年近く大切に維持していた白血病細胞がシャーレの中である日突然ピッカピカに増殖してきたこと、免疫電顕で培養細胞中に *Theileria orientalis* 原虫が観察できたこと、電子顕微鏡で探していたウイルスが見つかったこと等枚挙に遑がありません。が、やはり一番は SCID マウスに *Theileria orientalis* 原虫を感染させた培養細胞を接種し、その原虫が SCID マウスに移植したウシ赤血球に感染したことです。納谷さんや学生さんと夜中まで鏡検し、赤血球の中に原虫が見つかった時のドキドキする感激は忘れられません。② 学生時代を含め40数年もの長い間本当にお世話になりました。ありがとうございました。教員生活41年間で病理学研究室に所属した学生さんだけでも360人を超えました。一人一人大変懐かしく思い出されます。また、学内外の多くの先生方と共同研究できたことも大変感謝しております。人は一人では中々難しいことも何人かで協力し合えば解決できるという事を学びました。大学も大変難しい過渡期を迎えていると日々感じています。僥越ですが、麻布大学が今以上に魅力ある大学になり、これからも学生さんが心から麻布大学で学んで良かったと思える大学にして頂けたらと思います。



楽

毎年新しい学年の学生さんたちと楽しく交流できました。4年生の卒業を見送るのは寂しさがありました。卒業後に連絡が来たり、社会人となった姿を見せてくれるのはとても嬉しく、また頼もしく思いました。

生命・環境科学部 食品生命科学科 食品分析化学研究室
教授 良永 裕子

① 在職中の一番印象に残ったことと言えば、やはり何と言っても、コロナ禍で学生さんたちが大学に来られなくなった出来事です。オンライン授業の資料作りはとても大変でしたが、良い勉強になりました。また対面でのコミュニケーションの大切さを実感しました。② これまで教職員の皆様には大変お世話になりました。特に職員の方々には、ご多忙中にもかかわらず、いつも丁寧でにこやかにご指示下さいましたこと、心より感謝申し上げます。どうもありがとうございました。



試

担当科目が国家試験に直接繋がる「総合臨床検査学」であったため、1年が国家試験で始まり、国家試験が終わるという日々でした。

生命・環境科学部 臨床検査技術学科 総合検査学研究室
講師 高田 香世子

① 第63回国家試験において多くの学生さんが合格したこと。たまたま担任を仰せつかった学年でもあり、臨床検査技術学科の先生方と共にクラス全体で一丸となって勉強したことがとても印象に残っています。② 2008年の改組の時から15年間お世話になりました。現在は15年前とは異なり病院勤務を経験された先生方が増え、学生さんはとても充実していると思います。また、臨床検査技師の資格をお持ちの先生方が研究や教育に従事されていることで、学生さんはとても励みになると思います。これからも麻布大学、臨床検査技術学科の益々の発展を願っております。有難うございました。



麻布大学 ワンだふる 本募金

麻布大学ワンだふる本募金とは？

在学生、ご父母、卒業生、教職員、近隣住民のみなさまから、読み終えた本や、不要になった CD、DVD、ゲームソフトなどを提携業者にお送りいただき、提携業者が買い取った金額を、みなさまからの寄付金として麻布大学に全額寄付いただき、学生用図書資料購入や環境整備等に充てるプロジェクトです。

【かんたん申込み】 ●ご自宅では段ボール箱に詰めてWEBから申込みをするだけです。 ●5点以上ならば送料はかかりません。

お申し込みは、WEBで受け付けています。
買取査定についてなど、詳細はこちらのホームページをご覧ください。
<https://www.charibon.jp/partner/azabu-u/>

※書籍等の集荷については、株式会社バリューブックスに運営をお願いしています。



マスコットキャラクター
フルボン

雑誌 スポンサー 募集

雑誌スポンサー(広告主)を募集します。

スポンサーになっていただくと新刊雑誌のカバーに広告を掲載することができます。雑誌は、学生をはじめ図書館利用者が閲覧しますので、宣伝や地域のPRに最適です。

【スポンサー特典】 ●図書館所蔵の図書を借りることができます。 ●他の図書館等との相互利用サービス*1 を利用*2 できます。

※1 本学で所蔵していない資料を他大学等に複写依頼できるサービス ※2 基本料金+複写料金+送料がかかります。

- 【募集対象】 企業、団体のほか個人も受け付けます。(※審査あり)
- 【スポンサー料】 雑誌の年間購読料
- 【対象雑誌】 図書館で指定する雑誌リストからお選びください。
- 【広告規格】 ●カバー表:縦10cm×横17cm
●カバー裏:カバーのサイズを超えない範囲
●雑誌架:雑誌架の扉のサイズを超えない範囲

お申し込み方法など、
詳細はこちらのホームページをご覧ください。

https://library.azabu-u.ac.jp/azlib/sponsor/sponsor_info.pdf



マスコットキャラクター
しおりん

編集後記

相模原市との懇談会のコラムでは、市庁舎展望室を紹介しました。誰もが無料で訪れることができますので、是非とも機会を見つけて眺望をお楽しみください。今号は秋のイベントを特集し、附属高校では翔瀬祭等をTOPICSとして取り上げ、大学では一般来場者を招いての大学祭を開催させた実行委員のインタビューを行いました。コロナ禍で途絶えていたため、全くの引き継ぎのない中、暗中模索状態で取り組んだ彼女等の奮闘ぶりが伝われば幸いです。また、大学が取り組む各補助金事業として文部科学省から採択を受けた3プロ

ジェクトも特集いたしました。本学の目的・達成目標に対して、高い評価を得た結果が補助金という形であられたことであり、今後の邁進を期待するとともに教職員の更なる協力が必須となりますので、皆様宜しくお願いたします。GREETINGとして、今年度で退職される先生方からの言葉を頂戴いたしました。長きにわたり、学生のため、本学園のために御尽力いただきましてありがとうございました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

総務部 渉外課長 白石 一郎

地球共生系

～人と動物と環境の共生をめざして～

麻布大学の建学の精神は「学理の討究と誠実なる実践」です。

本学は、創設者よくら はるたか與倉東隆先生の建学の精神である、学理を討究し実践を重んじる誠実なる校風を受け継ぎ、

人と動物との共存および人と自然環境との調和の途を探求することを目的として

獣医学、畜産学、動物応用科学、生命科学および環境科学に関する専門の知識を教授研究し、

その応用力の展開をはかるとともに、進んで学術の進歩と国民生活の向上に寄与し、

平和社会の建設に貢献することとしています。

大学

[獣医学部]

- 獣医学科
- 動物応用科学科

[生命・環境科学部]

- 臨床検査技術学科
- 食品生命科学科
- 環境科学科

大学院

[獣医学研究科]

- 獣医学専攻(博士課程)
- 動物応用科学専攻(博士前期・後期課程)

[環境保健学研究科]

- 環境保健科学専攻(博士前期・後期課程)

麻布大学附属高等学校

- 普通科

附置・附属機関

- 附置生物科学総合研究所
- 附属学術情報センター
- 附属動物管理センター
- 附属動物病院
- 大学教育推進機構
- 研究推進・支援本部
- 地域連携センター
- 麻布大学いのちの博物館
- 健康管理センター
- 麻布大学フィールドワークセンター

学園情報 174

AZABU UNIVERSITY 2023年3月1日発行

発行／事務局 総務部 渉外課

〒252-5201 神奈川県相模原市中央区淵野辺1-17-71 TEL.042-754-7111(代表)



学校法人 麻布獣医学園

麻布大学

〒252-5201 神奈川県相模原市中央区淵野辺1-17-71

TEL 042-754-7111(代表)

FAX 042-754-7661

ホームページ <https://www.azabu-u.ac.jp/>

Eメール koho@azabu-u.ac.jp

総務部 渉外課



麻布大学附属高等学校

〒252-0206 神奈川県相模原市中央区淵野辺1-17-50

TEL 042-757-2403 FAX 042-751-6280

ホームページ <http://www.azabu-univ-high-school.jp/>

一般社団法人麻布大学同窓会

〒252-5201 神奈川県相模原市中央区淵野辺1-17-71

TEL 042-769-2183 直通 FAX 042-759-0337

ホームページ <https://azabu-doso.com/> Eメール doso@azabu-u.ac.jp